

安楽寺寺報

聞光

第 6 2 号
第 連 集 号
2012/2/15

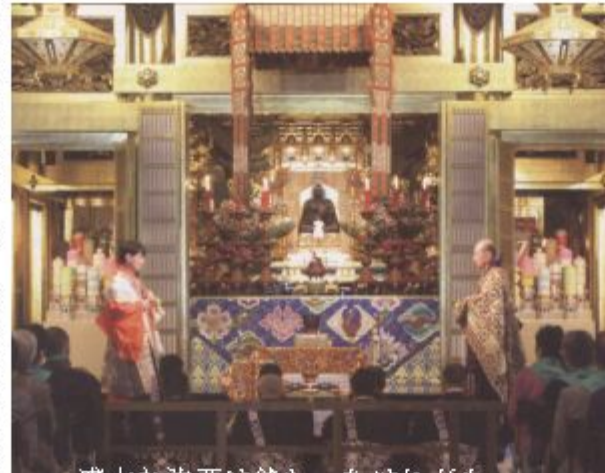
発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安 楽 寺
TEL.0823-21-7561

本願寺教団の現実に想う
信楽峻磨

親鸞聖人の七五〇回遠忌法要は無事終了しましたが、本願寺教団の現実状況は誠に悲惨なものです。ことに全国の農漁村地域における、過疎に基づく寺院経営は全く危機に瀕しております。西本願寺教団では、寺院一万余の中、その二割は無住であると言います。教団の責任者はこの現実をどう見ているのでしょうか。今もって何らの対策も講じてはいません。全くの無為無策です。

だがこの過疎地域に、まったく人間が住まなくなるはずはありません。私の地元の農民達は、互いに農地を抛出して株式組織を導入し、規模拡大の農業を試み、米作のほかに野菜や果樹などの栽培にも挑戦しております。教団もまた同じように、過疎

地域の寺院に呼びかけて、それぞれの門徒を統合していくという方向で、新しい寺院のあり方を模索すべきでしょう。将来に何を夢も希望も描けないのに、寺院の子供に寺院を継承せよというのは、あまりにも酷な話です。将来に不安を感じる寺院は、心おきなく統廃合できる道を開くべきです。そしてそれぞれの地域に、今までは伝えられた伝統の真宗信心を、何としても護り伝えようという心ある僧侶達がしっかりと団結するならば、必ずや新しい道が拓けてくるこ



盛大な法要は終わったけれども...

とでしよう。その具体的な方策は、それぞれの地域の実情を勘案しつつ、本願寺が責任を持って指導するほかはありません。私の寺院も広島県山内郡の過疎地域にあって、住民の数は急激に減少しています。真宗信心の伝統はしっかりと残っています。先日、報恩講法座には、地元の信者のほかに、隣の市からも自動車に相乗りして、またバイクに乗って、さらには遠く北海道からも二年連続でお参りになる人もあって、本堂はほぼ満席となり、伝統の黒塗膳のお斎も、世代交代した若婦人たちによつて立派に用意されました。問題は、それぞれに伝統されている真宗信心を絶やしてはならない、これからも護り伝えていこうという、そういう確かな意識を持つ僧侶がいるか、いないかです。だが教団当局が無策で

あるから、末端の住職はみな逃げ腰になっています。これではどうしようもありません。そのことは何よりも、本願寺の首脳者の無能性と無責任性によるものにほかなりません。西本願寺当局は、これから東京に新しく五〇〇の寺院を建立すると言っています。しかしながら、今日までの本願寺を支えてきたのは、今は過疎にあえぐ農漁村の住職と門徒たちの、ひとかたならぬ信念によるものです。だが、本願寺の首脳者は、これらの永年の恩義を忘れ、疲弊に悩む地方寺院を何らかえりみることもなく、それを弊履のごとく見捨て、東京に新しい馬を育て、それに乗りかえようというわけなのです。まさしく忘恩の徒の所行と言わざるをえません。仏法の原理にも背くことはなほだし話です。そんな者がまことの仏法を語り、伝えることができるのか。そういう世俗的な発想で、まことの仏道が拓けてくると思うのか。いよいよ本願寺教団の将来が案じられてくるころです。

辰己家4人目の初参式



11月26日辰己家の四女慈和（あいな）ちゃんの初参式を安楽寺本堂にてお勤めしました。

辰己洋君は、洗心道場の最初からの道場生で、そのご縁で平成13年3月24日に当安楽寺初の結婚式をあげてくれた青年(?)です。その日は忘れることができません。なぜなら15時27分にマグニチュード6.7の芸予地震が発生した日なのです。午前中に結婚式を終えて、広島での披露宴に向かう途中でした。広島駅の真ん前で、たいへんな揺れにあい、披露宴会場のホテル前は陥没。奥に帰る道はまったく動かないという状況でした。その後も色々ご縁をいただき、長女陽菜ちゃん、次女葵衣ちゃん、三女綾蓮ちゃんちゃん、そしてこの度四女慈和ちゃんの初参式を本堂でお勤めいたしました。現在辰己君は連研へ参加してくれており、いよいよご縁を深めているところです。呉の街でたまたまであったところからこんな深いご縁となりました。「袖触れ合うも多生の縁」です。因縁あればこそご縁です。多くの皆様とこうしておつきあいができればと願うところです。どうぞお近くの方とお誘い合わせの上、お参りください。また安楽寺での初参式、結婚式とお勤め下さい。



七五〇回大遠忌御正当参拝

1月15日、親鸞聖人750回の御命日の御正当にお参りさせていただきました。10月に安芸南組で団体参拝をいたしました。この度は新発意と2人でお参りをしてきました。長女慈は受験、長男慧も大学が忙しくて、50年に一度の勝縁にお参りできないかと、諦めかけていたのですが、15日の法要だけに日程があり、一緒にお参りしてきました。50年後70歳になった長男が、「750回大遠忌にお参りしたな〜」懐かしく思ってくればと思います。

これを書いている私も、また読んでいる方もほとんどいないのかもしれませんが。そんな先を楽しみに想像できるのも、この念仏の教えの歴史のおかげと有難く思います。



安楽寺法要案内

三月	彼岸会	日時	3月11日(日) 朝・昼
		講師	安浦 信楽寺 広幡康祐師
		テーマ	「3月11日から1年、み仏のみ教えを聞くものは…」
四月	花まつり	日時	4月14日(土) 朝・昼
		講師	海田 真宗寺 小川照信師
		テーマ	「念仏がひらく世界」
五月	降誕会	日時	5月20日(日) 朝・昼
		講師	吉田 善立寺 松林行圓師
		テーマ	「真宗の信心と、他宗の信心は 何処の違いですか」
六月	永代経	日時	6月8日(金) 朝・昼 6月9日(土) 朝・昼
		講師	美祿 正隆寺 波佐間正巳師
		テーマ	「いろいろな宗教を比較して」

聞見

無責任

信楽晃仁

一月二三日、イタリア豪華客船「コスタ・コンコルディア」が沈没で座礁し、沈没しました。豪華客船が沈没するというのは大事件ですが、それだけではなくこの豪華客船のスケッチャーノ船長が大変な話題になりました。というのも船が座礁し傾きはじめるやいなや、船と乗客をおいて逃げたと言うことが、大々的に報道されたのです。その後ヨーロッパでは「スケッチャーノ」が無責任の代名詞にもなったという報道もありました。

しかしスケッチャーノ船長を笑ってばかりはおられません。私たちは大丈夫なのでしょう。日本は大丈夫なのでしょう。

カッコーと言う鳥をご存じだと思います。見たことはなくとも名前がよく知られた鳥です。そのカッコーは托卵という子育て(?)をします。それは自分の卵をモズなど他の鳥が留守の間にその巣へ卵を産み付け、他の鳥に育ててもらおうのです。その



カッコー

托卵という方法はとても巧妙だそうです。「托卵の仕方は巧妙で、托卵をする鳥は産卵中の宿主の巣から卵を一個抜きとった後、自分の卵を一個産み込む。産み込まれた卵は宿主のヒナより一日か二日前に孵化し、宿主の卵を背中のくぼみにのせ、すべて巣の外に放り出してしまふ。こうして巣を独占したヒナは宿主の世話を一身に集めて育てられる。」のだそうです。親が親なら子も子です。カッコーが産み付けたその卵を自分の卵だと思つて育てるモズ達が一番かわいそうです。自分の本当の子は外に捨てられて、育つことができないというのですから。

私はこのカッコーと同じく、人間も後世の事典の「人間」という欄に「托卵の習性を持ち、自分では子育てできない猿の一種」と記載されるのではないかと心配しています。

に思います。平成十五年の二月三日の産経新聞にある東京の保育所の理事長自ら「保育園ががんばると家庭がダメになる」という記事を掲載し、当時、物議を醸しました。その理事長先生は、現場で保育園と家庭、そして親を見て、このままでは、親の責任がどこかに飛んでしまい、日本の家庭はダメになってしまうと思われたのです。その警告はもうすでに忘れられ、日本は一直線に保育園化へとつき進んでいます。子育てに忘れられている大切なものがあるという指摘に耳を貸さず、一直線に利便性や自分の欲望を追い続けるような、社会や家庭のあり方に危機を感じています。

そこです。次頁に二つの投稿記事を紹介いたします。保育所であろうと幼稚園であろうと、それをどう言おうのではありません。私たちの目が本当に子どもに向いているかどうか、私たちが問われるのです。私たちは本当に責任を感じてきたのだろうか。どれほどの責任を持つて子を育ててきたのだろうか。私自身振り返ってみて、この投稿の記事

朝日2012/2/10声

葛藤の末、保育所に娘預けた

主婦 檜崎佳子

昨年未から三歳の娘を保育園に預けて仕事を始めた。ただこの決断をするまでには、かなりの葛藤があった。私は「子どもが三歳までは自分で育てよう」と頑張ってきた。だがずっと家にいると、社会から切り離されたような気がして耐えられなくなった。世間には0歳から保育園に預ける人もいる。その人たちを羨ましいと思う反面、疑問に思う気持ちもあった。そう思うのも、専業主婦で五人の子を育てた母の影響が大きい。

けることを知った母は「朝、保育園に子どもを押し込んだら、後はお化粧したりおしゃべりしたり自由。独身時代と何も変わらない。『仕事』といえど何でも言い訳が立つよね」と皮肉たつぷりに批判した。「そんな気楽じゃないよ」と一言いい返したが、批判は当たっている面もある。迷う私の背中を押してくれたのは主人だ。「子どもは社会の中で育つ。保育園で色んな子どもと出会うのが財産になる」。結局、専業主婦であっても仕事を特っていても、大事なのは子育てに一生懸命になることだと気づいた。人と比べずに各人のやり方でやりましょう。

朝日2012/1/28声

母のひざの上 育った愛と知

高校生 平田康樹

(広島県呉市19)

幼児期から小学四年生の秋まで、母のひざの上で、本の読み聞かせをしてもらっていました。絵本や教科書など様々なジャンルです。母は僕をひざの上のせて、いつもこう言ってくれました。「康樹の重さは、命の重さ。母さんの責任の重さなんだよ」。高校生になった今でも、その言葉が耳から離れません。それが故に、横道にそれずに生きてきました。母のひざの上。そんな



愛情に守られていたことに気づいたのは、中学生になってからです。そこから一歩踏み出し、母を守る盾になろうと思いましたが、中学生では未熟でした。時々ふざけて母のひざの上のつたら、「重た〜い。殺す気か!」と、お笑い芸人のようにつつこんできます。これから、母が年老いで歩けなくなつた時には、背負つてあげたいと思います。母がおぶさりやすいように、僕は頭を垂れて、おんぶしてあげたいのです。母のひざの上で、愛と知を学びました。いつも口答えばかりしているけれど、心の中では母に感謝しています。

仕事のエロハ

御布施の意味

法事や月参りなど、僧侶を招いて仏事を勤める時、御布施が渡される人がいます。「いくらぐらいお包みすればよいのでしょうか。あまり少ないと失礼ですの...」といった調子です。

これは誰もが気になるところですが、これは御布施本来の意味を知り、お気持ちをお包みいただくのがよからうと思います。御布施は習俗化される中で、一種の「報酬」のように捉えられないでしょうか。僧侶が読経し

て扱ってしまいがちですが、それは間違いです。布施というのはそもそも仏教の大切な行の一つで「あまねくほどこす」という言葉です。仏教では他にほどこすというのを一番の徳目として大切にしてきました。ほっておけば取り込んで取り込

で、自分の中に何でもため込んでしまふ私たちに、少しでも手を離し、少しでも執着をなくすことに着目した行です。それを仏さまのお働きの中に込める形で、如来様へお供えします。それが万人の救いにつながるからこそ、私の施し